

台風が育んだ建築

高知の風土、特に台風などの自然災害が育んだ建築を高知の伝統的な建物にみることができる。高知の気候風土に適合するように様々な試行錯誤を繰り返し、残り、洗練されてきた建築様式がある。かつては台風の常襲県と言われ、強い風雨が真横から叩きつけるような状況が暫く続くような気象条件に耐えうる建築様式がある。当時の限られた建築材料として、土を焼き更に松葉の煙などで燻した銀黒の土佐瓦、石灰石に塩を入れて焼き粉碎し発酵した稻わらを混ぜて練り上げた土佐漆喰、材木として高知のヒノキ材や杉材が建物の主要部材として使われた。これらは高知の風土が育て上げた優れた地場の建材である。



過剰な民家の水切り瓦

次に水切瓦(みずきりがわら)を紹介したい。これは土蔵や県東部の大きな民家の壁に何段も水平に壁面から突き出している瓦の列をいう。瓦の出の大きさや瓦と瓦の連結部における念入りな左官仕事の具合など、高知独特の工法である。この水切瓦の役目としては、横に叩きつける雨が、漆喰塗りの壁を伝い流れるときに、雨水を少しでも早く壁から振り切るために、素早く壁から落とす機能を持っている。水に強い土佐漆喰の壁とはいえ、速やかに雨水を流したほうがいいのである。左官職人から見れば、手間がかかるので、高い工賃を稼ぐことができることと、一度に大きな面積を漆喰で塗り上げるのは大変なので、それを小分けに施工できることが可能となるので、都合が大変によろしい。また、施主にとっては、どれだけその家普請にお金を掛けたかが外見からすぐ分かるので、財力を示し見栄えも良くなるこの工法は、人気があって普及した。

高知では瓦の葺き方に工夫がみられる。桟瓦の種類に右と左があり、理由があつて葺き分けられた。桟瓦とは、今も使用される一般的な屋根瓦のことだが、現在生産されているものは殆ど右瓦(JIS規格品)である。屋根に葺かれている状態で下から見上げて、ひらがなの「へ」字に見えるのが右瓦とよばれる。ではなぜ、その反対の左瓦というものが高知で生まれたのか。正確に言えば、高知以外にもあるようだが、高知のように顕著ではない。桟瓦には山があり、山の部分を重ねて瓦を葺いていくが、そこに僅かな隙間が生じる。高知のように横から叩きつけるような風雨では、この隙間から雨水が浸入する。また、軒先がそり上がっている屋根では、反り上がる方向に瓦の重なりの隙間があると、大雨のときに瓦の表面を流れる落ちる雨水が滲み込んでいく。高知では、例えば香長平野に残る古い屋敷などに、土佐湾から来る台風の風向きを考慮して、屋根の向きにより瓦の葺き方を変えている例が見られる。軒の反り上がりによって瓦を葺き分けている例は、三翠園ホテルの門の南側に残る国的重要文化財に指定されている山内家下屋敷長屋の屋根が中央から左右に瓦を葺き分けているのがわかる。若干反り上がる四方の軒先に向かって、瓦の重なり部が向かないような葺き方をしている。



旧山内家下屋敷長屋

高知の風土が育んだ住まい・建物の技術として、屋根の葺き方と瓦の種類、水切瓦と三つほど例をあげ、伝統構法の建物は、外壁の柱が外から見える真壁工法で建てられている例が多い。時間が経過すると、木材の表面は黒や灰色に変わり、漆喰壁はあくまで白いままで、端正なモノクロームの景観だ。壁の面と柱の水平、垂直線の対比が美しく、少しあせた銀黒の土佐瓦がもつ落ち着いた地味な色彩は、時間が経過しても、なお美しい佇まいを醸し出している。



水切り瓦が美しい土蔵



長屋屋根中央部で瓦の葺き分けがわかる



高知地域会名簿(五十音順)

上田 勿世	上田 博史	岩谷 功	大井 達司
岡本 金弥	亀尾 明宏	佐藤 八尋	田中 顕夫
田中 健一	千頭 邦夫	徳弘 忠純	中越 敬典
橋本 健	平山 昌信	細木 茂	前田 博
松木 貴史	松澤 敏明	山本 長水	吉田 晋
依光 成元	渡辺 菊眞		